



はじめに

人生は選択の連続である、とはシェイクスピアの言葉。2011年3月11日の行動について選択肢はなかった。あったのは判断だけだった。数えきれない判断の繰り返しで出会った方々に導かれるようにして、いまこれを書いている奇跡。あったものがなくなり、予定していたものがなくなるということがあたりまえに起きたとき、驚くほど私たちが都合のいい「将来」を設定し、中途半端な「過去」を引きずって生きていたことが分かった。あるのは「いま」だけであった。選択したというよりもその方向に自ら身体が動いた、という方がしっくりくる。現在、私は発達支援や教育福祉分野のコーディネートなどを行いながら、書道塾taneという場を開いている。対人援助の仕事を行う中で大事にしてきたことが書道塾とどう関わっているのか、そこで起きる様々なできごと、変化、発達、対話、気づき、それらについて書き綴ってみたいと思った。

表現すること

小学校2年生から習っていた書道が、自分の仕事につながっていくとは考えてもいなかった。あたりまえのように疑問を持たずお手本をお手本通りに再現することで「上手ね」と言われ、疑問すら感じなかった幼少期から、作品を作って出展するたびに重なっていく違和感をもち、自分の作品を作ることがなくなった。なぜ書くのか、ということが分からなくなっていたところに、自閉症のある青年の保護者から書道を教えてほしいと声がかかったのがはじまりだった。「書きたい」という動機さえあればいい。彼らと書いていく中で、書道は自分自身で世界を作り出すことにも似ているとを感じるようになった。しかもそれが書くという一瞬で起きていく。自分の引いた線に影響され、次の線を決める。集中すればするほど目と手が自然に動き出し、世界が次々と作られていく。手本があって、それに近づけようとしてきた書道とは違う何か。それぞれの身体が作り出していく空間や、世界がそこに広がっていく。メルロ＝ポンティは「世界とわたしは互いに互いのうちにある」と言った。それらの表現は見る人を魅了し、技術や技法ではなく「その線がそこにあるべくしてある」まさに「わたしはここにいる」という存在感を持つ。

自己決定を引き出す

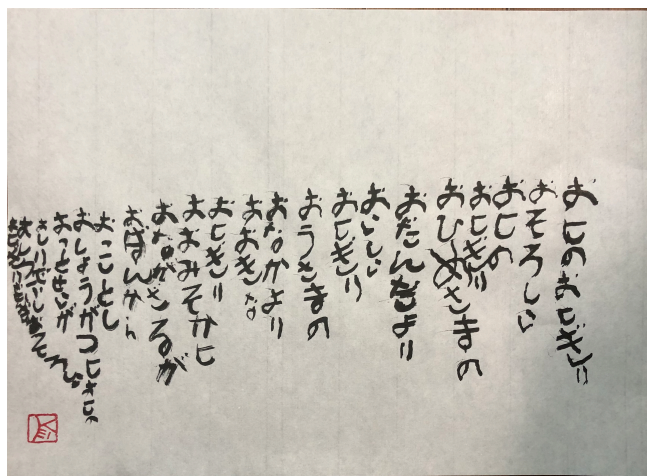
白い紙に向き合う中でどこから書き出すのか、どの字を選ぶのか、どのように紙の中に収めるのか、筆の動かす向きはどうか、どこで墨を付け直すのか、実は書道をやってみると瞬時にそれらの判断をしていることが分かる。文字見本や手本、文章などを見て書いている場合には、目の動き、それを認識して形をとらえ、そしてどのくらいの空間を考えて線をひくのか、など実にさまざまな判断をしなければならない。まさにそれは、瞬時に「自己決定」していることになる。

慣れない筆という筆記用具で、制限のない白い紙に何かを書く、という行為自体、実は「構造化」や「見通し」などを重視した自閉症への支援の中で出会うことのない機会である。ともすれば学校という場では表現活動である美術や図画工作ですら、「手順」にこだわらせ、どの子も同じような作品になってしまうということが起きる。それは彼らが、見通しを持ってないと活動できない（もしくは混乱してしまう）と、支援者が（勝手に）想像しているからである。

①黒い墨が容器に入っている、②穂先のある筆を手を持つ、③目の前には白い紙が置かれている、という「状況」ができあがることによって、とくに言語的な指示がなくても、誰しものが自然に「墨を筆につけて紙に書く」という動作が導かれる。さらには、鉛筆やペンのように力を必要としないために、「書く」というよりも「紙の上に置く」という行為だけで、書いてしまう。これが書道の偶然性である。自分が力を入れなくても、するすると書いてしまうので、まだ文字を知らない子どもたちはもっと自由である。そのうち、紙との接点にどれくらい力を入れればどれくらいの細さや太さになるのか、などという高度な力のコントロールができるようになってくる。まさにこれは、道具を通して身体感覚が拡張されている状態である。

Kくんの場合

自閉症のKくんは音声言語がなく、意思表示は笑ったり、声を出したり、拒否したり、などの表現はあるが、なかなか自発的な行動がなかった。18歳から書道にきて現在5年目。演劇の題字などの仕事のオファーも来るようになり、何よりこれまで関心のなかった文字に意味があることを知り、スマホで好きな音楽を入力したり、情報を文字で読み取ることも増えたという。最近では好きな詩を選んで書いているが、かなり細かい漢字も書けるようになっている。さらに、毎回終わった後に自分の書き上げた作品をじっくりと見て、「にやり」とするようになった。まさかの



「ドヤ顔」。表情も行動も、変化が多いこの5年間である。「お」という文字の並び方、上段の空間に対し、下は踊るような文字列のあそびが楽しさを強調する。Kくんの作品を見て、「ひらがなっておもしろい!」と思った方も多い。ちなみにKくんの筆はとても穂先が長く実はとても書きにくい。それをここまで使いこなすのだ。書きやすさ、書きにくさというものも、まさに自分だけの感覚である。自分がいいと思ったらよし。これが「誰でも調子に乗れる書道塾」の真髄でもある。

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。

「つなぎめを学ぶ講座」、「旅する書道塾tane」も開催中。<http://ikuko-sakurai.com>